

竹島問題どっへやら

韓国・原州市で10月末に開かれた国際ウォーキング大会に、こしも鳥取県から倉吉市のNPO法人未来(岸田寛昭理事長)や同NPOが募った人たちが参加した。一行に同行し、現地での交流の様子取材した。(中部本社・吉浦雅子)

韓国・仁川空港から、原州の年間を通じたバスで約2時間。田舎での一大イベント。これを想像していた原州は、10月27、28の2日間3車線の道路も整備され、紅葉したイチョウ並木が美しい人口33万人の大きな街だった。20、30、50の5コースを設定している。

「原州国際ウォーキング大会」はことしで18回目を迎えた。専用スタジアムも整備さ

韓国のウォーキング大会に参加

民間交流、深い絆



元気よく出発する岸田理事長(手前中央)ら

れの体力に合わせたコースを選んで参加した。だが、27日は雨と強い風の大荒れの天候。この参加者も多かった。こんな天気は初めてと9回連続参加している経験者。ポンチョやかるといって同行の男性が、つばに身を包み50キロから小学生の参加も多かったです。記者は無難に10キロから順次スタートから、積極的に話しかけ、荒天のためよとアドバイスされた。記者は無難に10キロから順次スタートから、積極的に話しかけ、荒天のためよとアドバイスされた。



韓国メディアの取材を受ける倉吉市からの参加者



「倉吉を愛する会」による歓迎会。ウォーキングへの思いを語りつつ夜は更けていった。

向いてひたすら歩くの若者ばかりで、「ウォを修正した。み。ときおり周りを見ーキングといったら年。まちなかから田園地帯、再びまちなかへと

足の付け根に痛さを感じながら、雨ニモ負ケズ約2時間半で完歩。先に到着していたメンバーや現地の人でつくる「倉吉を愛する会」の人々が笑顔で迎えてくれた。

その夜は愛する会主催の歓迎会。通訳を交えながら参加者らは大盛り上がり。竹島問題はどこへやら。同会は2010年に原州から倉吉市まで歩いた「日韓ピースウォーク」をきっかけに結成された。国の壁を越えた民間レベルの交流に絆の深さを感じた。

記者が帰路について28日は快晴。「もう一度歩いて、自分だけの交流をしたいな」と後髪を引かれる思いで原州を後にした。